

聖書：士師記 19：1～30

説教題：ギブアの日

日時：2015年1月25日

士師記 17～21 章はこの書の「クライマックス」とであると述べている人の見方を以前、紹介しました。この士師の時代はどのような時代であったのか、この書の著者は二つのエピソードを書き記しています。一つ目は 17 章と 18 章で見ました。そして今日の 19～21 章までがもう一つのエピソードになりますが、本日は 19 章を見て行きます。

まず出てくるのは一人のレビ人です。彼はそばめとして一人の女をめとります。このそばめはレビ人を嫌って父のところへ帰ってしまいます。2 節の「そのそばめは彼をきらって」という部分の「きらって」と訳されている言葉は「姦淫」を意味する言葉です。新共同訳聖書はここを「そのそばめは主人を裏切り」と訳しています。いずれにせよ、二人の関係には問題が生じた。レビ人は 4 ヶ月待ちましたが、帰って来ないので、ねんごろに話をして引き戻そうと彼女の家へ出かけます。すると彼女の父は喜んで迎えてくれました。自分の娘の結婚生活がうまく行かなくなり、実家に帰ってしまったことは、その家族にとって不名誉なことでしょう。できれば夫と仲良くしてもとに戻ってくれたら、と父としては願っている。そこへ夫が迎えに来たのですから父が喜んだのも自然でしょう。このレビ人を歓迎し、三日間、食べたり飲んだりして楽しく過ごしました。

しかしこの父はなかなかすぐには帰してくれません。四日目になって、さあ出かけようとして立ちあがると、彼女の父は「少し食事をして元気をつけ、そのあとで出かけなさい。」と言います。そしてすわって食べたり飲んだりして時間が過ぎると、「どうぞ、もう一晩泊まることにして、楽しみなさい。」と言う。しきりに勧めるので、じゃあもう一日だけと受け入れ、次の日の朝早く旅立とうとすると、また「どうぞ、元気をつけて、日が傾くまで、ゆっくりしていなさい。」そして時間が経つとまた「もう日が暮れかかっているから、もう一晩お泊まりなさい。明日の朝早く旅立てば良いでしょう。」こんな調子ではいつになっても帰れません。私たちはこの父親が何か悪い魂胆を持っているかのように見る必要はないと思います。むしろこの父はこういう人だったのでしょう。当時このようにもてなすことは普通のことでした。

しかしこの結果、レビ人が出発できたのは 5 日目の午後でした。日が傾き始めていましたが、これ以上泊まってはられません。しかし今夜はどこに泊まったら良いで

しょうか。エブスの近くまで来た時、若い者はここに泊まりましょうと提案しますが、レビ人はそうしないと言います。エブスは後にエルサレムとなる町ですが、ダビデの時代までは異邦人が支配していました。そんな外国人の町には泊まれない。何が起きるか分からない。だからイスラエルのギブアからラマまで行こうと言って、ベニヤミンの町ギブアに到着した時に日が沈みました。

ところがこの町では誰も家に迎え入れてくれません。同胞イスラエル人が困っているのに、助けてくれる者が一人もいない。これは当時の霊的状态をさし示すものでしょう。そんなところへ一人の老人が声をかけてくれました。彼はこの町の人ではなく、一時的に滞在しているエフライム族の人です。その彼が「どちらへおいでですか。どちらからおいでになったのですか。」と色々聞いて、自分の家へ招いてくれました。これぞあるべきイスラエル人の姿です。こういう一人現われて救われる思いがする場面です。しかし気になるのは20節の言葉。老人は「安心しなさい。ただ、足りないものはみな、私に任せて。」と言った後、「ただ広場では夜を過ぎさないでください。」と言います。何かここで過ごすと思いの悪いことでも起きるのでしょうか。

そうしてこの老人の家で暖かいもてなしを受け、くつろいだ一時を過ごしていた時、先ほどの不吉な言葉が現実となります。22節：「彼らが楽しんでいると、町の者で、よこしまな者たちが、その家を取り囲んで、戸をたたき続けた。そして彼らは、その家の主人である老人に言った。『あなたの家に来たあの男を引き出せ。あの男を知りたい。』」この「知りたい」という言葉は、性的関係を指す表現です。そしてここでは「あの男を」と言っているように、彼らは同性愛の対象にしようとしています。私たちは何を思い起こすでしょう。創世記19章のソドムとゴモラの話でしょう。あの時もロトの家に人々がこぞってやって来て、「我々はその人たちを知りたい！引き出せ！」と要求しました。あの出来事の再現です。いやあの時と違うことは、今回このように要求したのはイスラエル人であるということです。ソドムとゴモラは神を知らない異邦人でしたが、ギブアの人々は神の民です。その彼らがソドムのようになっています！

老人は「いけない。兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでくれ。」と訴えますが、人々は聞こうとしません。そのどうにも動かない状況を見てか、レビ人が自分のそばめを外に出します。するとギブアの人々は恐るべき行動に出ます。彼らは彼女を犯して、夜通し、朝まで暴行を加え、夜が明けかかるころになってやっと彼女を放しました。そして彼女は結果的に死にます。レビ人は彼女を後に12の部分に切り分けて、12部族それぞれに送ります。イスラエル人はこれを見て言います。30節：「それを見た者

はみな言った。『イスラエル人がエジプトの地から上って来た日から今日まで、こんなことは起こったこともなければ、見たこともない。』ここは誰もが激しい嫌悪感を持たずには読めないところでしょう。後にホセアがこの日についてホセア書9章9節でこのように言及しています。「彼らはギブアの日のように、真底まで墮落した。」(10章9節も)。イスラエル人の間では「ギブアの日」と言えば、どんなことがあった日だったかすぐに分かった。すなわち、ギブアの人々がレビ人のそばめを夜通し暴行して死に至らしめ、その死体は12部族に送られて、国中に戦いが起こった日ということです。これはイスラエルが「真底まで墮落した」代表的出来事であった。イスラエルの全歴史の中でも最も忌むべき姿をさらけ出した日であったということでしょう。

しかし、悪いのはギブアの人たちだけでしょうか。他の登場人物についても私たちは検討しなければなりません。まずレビ人を迎え入れてくれた老人についてです。彼は善良な人としてこの物語に登場して来ました。誰もレビ人を迎え入れてくれない中、彼だけは優しい気遣いを持って招き入れてくれました。そしてギブアの人たちがやって来た時、町中を敵に回しても、レビ人を守ろうとしました。しかし彼はその時、何と言ったのでしょうか。24節：「ここに処女の私の娘と、あの人のそばめがいる。今、ふたりを連れ出すから、彼らをはずかしめて、あなたがたの好きなようにしなさい。あの人には、そのような恥ずべきことはしないでくれ。」これもソドムの記事と良く似ています。あの時、ロトも同じことを言いました。「男を知らないふたりの娘を連れて来るから、あの人たちには何もしないでください。」と。どんなことがあってもこの人を守らなくては！という責任感は分かりますが、だからと言って代わりに自分の娘を差し出したら何にもなりません。これでは「罪の交換」をしただけです。

また老人はレビ人のそばめも外に出すと言いました。勝手に人の妻をこのようにすると提案するのは、あまりに失礼なことではないでしょうか。このような彼の言動をどう評価すべきでしょう。カギとなる御言葉は19章1節の「イスラエルに王がなかった時代のこと」というコメントです。これは17章6節を受けた言葉です。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」これは士師記最後の節、21章25節にも繰り返されて強調されています。すなわちこの老人は善良な市民に見えたけれども、ギブアの町で悪に染まっていない希望の星に見えたけれども、その彼でさえ「自分の目に正しいと見えることを行なっていた」という人々の一人でしかなかった。表面的にはギブアの人たちとは違うようですが、本質的には同じ土台に立っていた。むしろ彼のこの愚かな提案によって「ギブアの日」

の混乱は一層大きなものとなったのです。

もう一人はレビ人です。彼はエブス人の地ではなく、イスラエル人の町で宿を取ろうとするあたりは、まことのイスラエル人らしい性質を示すものと見えます。ところが皮肉にもそのイスラエル人の町で彼は災いに巻き込まれてしまいます。彼は単なる被害者なののでしょうか。彼は 24 節の老人の提案を聞いた時、抗議しませんでした。そればかりか 25 節には、彼が自分のそばめをつかんで外に出したとあります。彼は彼女を連れ戻すためにわざわざこの旅をしたのではなかったのでしょうか。なのになぜ彼女を外へ投げ出したのでしょうか。それは自分を救うためでしょう。ギブアの人々の要求は、自分一人に向けられていることを彼は知っていました。狙われているのは他ならぬ自分です。その時彼は、外で荒れ狂う人々の注意を別の方向に向けるため、そばめをつかんで外に出した。そうしなければ自分が危ない。そうしてそばめが暴行を受けている間、彼は朝まで寝ていました。そして朝、戸を開けて、彼女を発見して最初にかけた言葉は「立ちなさい。行こう。」というぶっきらぼうなことばでした。そして家に帰ってその死体を切り刻んで 12 部族に送ります。一見、これは義憤から出た行動のように見えます。この事件を知らしめ、人々を霊的無感覚から呼び覚まそうとしたように見えます。しかし彼は正義を求めてこのように行動したとは思えません。なぜなら、正義を主張する人がどうして自分の手でそばめを外に出すのでしょうか。いかにも自分は被害者であるかのような振りをしていますが、実際には彼も加害者の一人を立派に演じていたのではないのでしょうか。ではなぜ死体を切り分けて 12 部族に送ったのか。それはベニヤミン族への復讐の念でしょう。「義を求める正しいイスラエル人」を装いながら、実際は自己中心的な思いに突き動かされていた。そしてこのレビ人にかき回される形で、イスラエル人は 20 章で内戦へ突き進むのです。このレビ人の自己中心的な振る舞いが「ギブアの日」と呼ばれるこの日の悲惨を一層大きなものにしたのです。

私たちがここから思うべきことは何でしょう。それはイスラエルは神の民なのに、主の目に正しいことを基準として生きている人は誰もいないということです。めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。その結果、彼らはあのソドムのようになっていた！神を知らず、罪に染まり切っていた人々を映し出すような、その彼らに似るような最悪の状態にまで落ちてしまった。私たちはこれを見て、高いところから彼らをさばくべきではないと思います。むしろ私たちは、今日の自分たちにこれが当てはまることはないだろうかと自己点検すべきではないのでしょうか。主の御言

葉に聞き従い、主に治めていただくのではなく、自分のしたいことを優先し、自分の目に良いと思うことを行なうという自分を主とする生活、王とする生活、神とする生活を送ってはいないだろうか、と。もしそうであるなら、今日も「ギブアの日」は起り得るのです。いつの間にか周りと一緒にになって恐ろしいギブアの日の立役者を演じる一人になってしまうのです。私たちはこの士師記の記述を通して、もう一度確認させられたいと思います。私たちは自分の愚かな判断によってではなく、今や「神の知恵」に聞いて歩む幸せを知った者たちです。神はみことばにおいて、知恵の道、最善の道を示して下さっています。私たちは常に主のみことばに聞き、主の目に良い、また主が正しいと見られることを選び取り、主が私たちの王として治めてくださる上からの祝福を楽しみにし、そこに導いていただく主の民の特権と幸いにこの週も歩みたいと思います。